

〔聞き取り記録〕

私の戦争体験

柴 崎 信 緒

〔解題〕

昨年（二〇二三年）一〇月より、校友およびその関係者を対象に戦争体験をお聞きし、映像に撮らせていただく事業を進めている。これまでに一八人の方にのべ二六回にわたって体験談をお聞きした（二〇一四年一月現在）。今回原稿をお寄せいただいた柴崎信緒氏には、二〇一三年一月二〇日、二〇一四年一月一日、三月二日と計三回にわたり、当センターにて戦争体験をお伺いした。本稿はその時の聞き取り原稿を基に、柴崎氏がまとめ直してくださったものである。

柴崎氏の軍隊時代までのおおまかな略歴は、以下の通りである。

一九二三年八月二〇日東京生。四一年四月早稲田大学専門部法律科に入学、四三年九月繰り上げ卒業。同年一二月武山海兵団入団、翌四四年三月海軍第四期兵科予備学生となり、七月横須賀海軍通信学校（久里浜）に入校。一〇月からは第五十二号駆潜艇乗組員となり、小笠原の父島基地への輸送船団護衛に従事。翌二〇年四月佐世保鎮守府付と

なり、佐世保港と朝鮮南岸各港、および中国北部各港への輸送船団護衛を担当した。

なお戦後は繰り上げ卒業と同時に就職した東急電鉄にもどられ、のち東急エージェンシーに勤務された。

本稿を補完する資料として、末尾に柴崎氏の手記を影印（原稿画像）で収録した。これは一九四五年八月八日、駆潜艇乗組員として海上航行中に遭遇された米戦闘機P-38との対空戦についての手記で、戦闘当日の夜に書かれたものとのことである。

最後に、貴重な戦争体験談をお聞かせいただき、本稿をおまとめくださった柴崎氏に、記して感謝申し上げます。

望月雅士

私の戦争体験 柴崎信緒

一 早稲田大学時代

生年月日は。

柴崎 大正十二年八月二十日、東京の赤坂で出生。

——お父様の職業は。

柴崎 父は大正四年かに明治大学商科卒、実家は今でもある赤坂氷川神社宮司の実父の長男ながら神職を嗣がず、社会人となり、卒業と同時に羅紗の輸入販売商社に入り、三十歳前後のとき、二年間、主たる取引先のイギリスに行っていました。母の話では、イギリスからの帰途にひどい風邪をひき、それがもとで呼吸器をやられ、昭和六年一月二十日に、三十八歳で若死しました。私は三つ上の兄と、そのあとずっと母子家庭で育ったわけです。

——中学はどこら。

柴崎 品川区の立正中学校です。

——そもそも早稲田を志望された理由は。

柴崎 中学時代に文学かぶれをしまして、美術史に堪能な日先生からイタリアのルネッサンスについて連続講義があり、非常な興味と若さの憧憬みたいなものを抱いたのでした。私のそんな夢を再三、日先生に訴えましたら、お前がもし本気で志すのなら、坪内逍遙の早稲田へ行くのがいいと、種々理由をあげて奨めて下さった。そうした一幕

が、わが早稲田への希望の原点と言えます。ところが、現実の問題として母子家庭のつましい限りの家計を無言のうちに母の日常を見た時に、昭和十五年には兄が徴兵で陸軍に行き、私は母と二人の生活になり、もうこんなきびしい世の中になって、自分だけ夢を追うようないい子になるわけにもゆくまいと、悟りました。ただ、修学短期の専門部でいいから、一度目ざした早稲田へ入りたいので、母にはただただ頭を下げて、専門部の政経と法科を受けました。まあ、卒業して働いて、余裕ができたなら三十過ぎてても文学部を受ける手もあるだろうなどと、一面では思ったものです。

それがまさか、入学したあと、繰上げ卒業、即学徒出陣という事態が待っていたよとは毛頭思いもしませんでしたね。

法律科の口頭試問では、のちの総長、大濱信泉先生だったのです。その最初の一言が忘れられませんが、「君、よく来た」と。あるいは皆にそう申されたかも知れません。でも私はこの一言にすっかり感激しちゃいましたね、政経でなく、幸い法科に入りました。

——昭和十六年四月に入学されて、何か印象に残る講義はありますか。

柴崎 法律哲学、和田小次郎先生です。いつも手ぶらで来られて、二時間訥々と、休みなく講義をされる。和田先生の法哲の基盤は、何より社会が平和でなければいけないということなのです。平和の中から哲学が生れる。その理論の敷衍だったと思います。また、民法の外岡茂十郎先生、当時の野球部長でしてねえ、この先生が私の住んでいた近くに居られて、通学の時に、駅で時々お会いするのです。穏やかだけれども勉強には非常に厳格でした。

それから、刑法の江家義男先生（教授）と、斎藤金作先生（助教授）。江家さんは「教育刑主義」の立場、斎藤さんは断固として「応報刑主義」、ご両所の論陣は傾聴したものです。具体例が多くて面白かったです。

——当時、「大東亜共栄圏」が何とかというような授業は。

柴崎 時事問題としては触れざるを得ないことですが、それに同調する精神論的な講義はまずなかったと記憶しています。十八年に入って、六ヶ月もの繰上卒業、即兵役ということになったのですが、八月末頃最後の授業が契約法の中途の部分でしたが、教授は「これがこの学年の最終」だというのに一切ふれなくて淡々と本来の学問を説き、時間がきて、今日はこれまで、とふだんの通り終るのです。

——続きは生きて帰ってきてからという意味なのですね。

柴崎 あれは大野先生、たしか当時講師の方でした。

——卒業式で、当時の田中穂積総長が訓示をされましたが。

柴崎 私が終生早稲田に愛着を持っております一つが、そのときの田中総長の送別の辞です。「早稲田大学は諸君を社会人として世に送り出すのが目的である。諸君らは軍隊に行くとしても必ず生還して社会に貢献してほしい……」当時としては、これは何を意味するか。後年ホームカミング・デーに参りました際、時の小宇宙丸総長が、この訓示について話されました。「この田中総長の一言は、早稲田学報に載っておりますが、早稲田の歴史に残る一言です」と。まさにそのとおりですね。

——少し戻りますが、入学して一年目に「錬成」という授業があったと思うのですが。

柴崎 一年生の間、毎週一回、午後東伏見のグラウンドへ行って、体操をやりました。時局に見合う必修科目といったものです。ただ、学生はヤレヤレ……といった顔でね。多分、下士官クラスの出身の教員にしがれました。

——早稲田でクラブ活動には入られましたか。

柴崎 私は自動車部に入りまして、昭和十七年に戸山ヶ原の教習所で当時の小型運転免許というのをまずとりまし

た。自動車部といっても、戦中のことなので、一種の軍事訓練にも見合う内容の趣旨でした。ところが、部に自動車そのものがないので、訓練の日は車を借りて来るしかない。小型免許でも持っている者は後廻しで、初心者から先に習っているといった、あまり実効の上らないものでした。

——昭和十七年四月十八日に最初の空襲がありました。

柴崎 ちょうど土曜日の昼頃でした。この日も自動車部の定期訓練日でしたから、初空襲初体験に巡り合ったのです。

B-25が超低空で、グランド方向から図書館方向に向ってきかと思えます。皆、口あんぐりあけて「見なれない飛行機だ」などとつぶやいていた。しかし鶴巻町あたりにドカドカと焼夷弾を落し、これが鶴巻町のそば屋を直撃した。おやじさんが天ぶらをあげていたところで一挙に激しい火事になりましたから、そこではじめて、こりゃ大へんだと大騒ぎに。もう自動車部どころではなく、我々も狩り出されて学校周辺の警戒に当り、二時間位バリケードをつくりました。あれが最初に見た戦争でした。

——鶴巻町のどの辺ですか。

柴崎 今のロータリーから五十メートル位行ったあたりと思いますが、現在は街並がすっかり変って、あの時の店はありません。

——昭和十六年十二月八日に戦争が始まり、二年、三年生の段階で何か変化があったのでしょうか。

柴崎 もう、十六年と十七年十二月には翌年三月予定を繰上げて、三年生は卒業し、私たちは十八年に三年になった時、一挙に九月卒業、その年に満二十歳になる日本中の学生は従来の在学中徴集延期を打切られて、いわゆる学徒出陣となるのです。私たち、九月卒業生もこれと一緒に出陣となったわけでした。

したがって、三年次は四月から大幅にカリキュラムは変更になり、みな六ヶ月後に兵役という現実が迫ったので、

やはり緊張しましたね。専門部を終えて、学部に進学したい者が多かったのですが、それも大半不可能というわけです。事務所へ行って聞いても「国の情勢が逼迫してくると、カリキュラムが縮まる、皆さんも想像つくでしょう」と、具体的なことは答えられないわけです。

私は九月に卒業したら、一応就職して家計に少しでも…という次第でした。

——就職はされたのですか。

柴崎 はい。当時会社も八月には入社試験をやっておりました。

——どちらへ。

柴崎 東京急行電鉄です。偶々友人の父君が会社の役員をして居られるのをきいていたので、図々しく友人に頼みました。彼は「あゝ、いいよ」と引受けてくれて、父君もオーケー、その代り入社試験はあるよと釘をさされましたが、何とか入れました。

——実際の勤務はいつから。

柴崎 九月中頃に学卒者約三十五人の入社式があり、すぐ入社研修、各部門に配属されました。普通の社員同様、入社研修の後にそれぞれ仕事をしましたが、すでに徴兵検査も受けており、十二月に海軍入りが決っていたので、勤務は僅か二ヶ月でした。仕事はあの小型免許をもっているというので、バスの「自動車部」へ廻されました。

二 海軍入隊

——徴兵検査は。

柴崎 十八年の八月に、当時の日本橋区役所で、身体検査と飛行適性検査を受けました。適性検査といっても、何と

も幼稚な装置のもので呆れ返りましたが、それでも私は適性なし、ということでした。

——適性検査は飛行科だけでしたか。

柴崎 飛行科だけでした。それ以外の各科については十二月入団後に逐次行われました。

——徴兵検査の結果は。

柴崎 第一乙種合格です。

——海軍を志望されたのですか。

柴崎 いえ、特に志望はしておりませんが、決定通知は海軍でした。十二月九日に武山に入ることになりました。

——出征はどのように。

柴崎 十二月九日の朝八時迄に、高輪泉岳寺に集合とあったので、目黒駅から都電で泉岳寺に参りました。境内に受付があり、学生服姿が多勢つめかけていて、品川から臨時電車で逗子へ。そこから長い行列をつくって武山海兵団に入りました。

——泉岳寺へはお母様が見送りに来られましたか。

柴崎 母は目黒駅まで来てくれましたが、ここ迄と淡々として帰りました。これがあるいは一生のわかれになるかと、ふと思いました。

——お母様から、生きて帰ってこいとか、そのようなお話はありましたか。

柴崎 全くそういう言葉も態度からもなかったです。しかし、いろいろあり過ぎて言えなかったのではないのでしょうか。

——武山海兵団に入団して、まずどのようなことをやるのですか。

柴崎 入団したその日に、すぐ予備学生志願書を書かされ、次に袋を配られて私物一切を入れて、それぞれの自宅へ送り返しました。

翌日から最下級の水兵服で「シャバツ気を抜く」と、減茶苦茶追い廻され、ど突かれる「訓練」が始まりました。その時の入団者はすべて学徒兵ばかりで、約五百人もいた筈です。分隊ごと、班ごとに編成され、班長という下士官、十班〜十二班で一個分隊となり、中尉の分隊長、全学生分隊を一部隊として中佐の部隊長がつく。別にそこは海兵团ですから海兵团長がいるのです。

——古参兵との関係は。

柴崎 班長、助教の古参下士官はシゴキの名人というべきで、ことあることにずい分やられました。

三 海軍通信学校時代

——それから兵科に進まれたそうですが。

柴崎 暗号専修で久里浜の通信学校へ参りました。これは希望ではなく、基礎教育中の適性をみて振り分けたものでした。

——最も多いのが飛行科と陸戦隊です。少数が電測（初期のレーダーでしょうか）、通信など、他に主計にごく少数です。通信とは具体的にどのような内容ですか。

柴崎 暗号には各種あります。全部の説明ではとても長くなるので、代表的な最重要「軍機」扱いの「呂」について申しますと、三重四重に変換して解読難度の高い仕組みにしています。まず、国語辞書のような、語彙とそれぞれに数学を付した一冊と、暗号作成の日時にこまかく数字を付した手引書が一冊あります。該当する語の数字と手

引書の数字を加算しますが、そのひとケタの数のみを使用する原則で文章を暗号化します。この文章を更に二つか三つに区切り、順序を変えて送信する。その変える順序を更に別の暗号で送ると、そういう仕組みになっています。この軍機電報は、作成、送受信とも士官担当者限定という条件でした。「軍機」「最高機密、以下「軍極秘」「極秘」「秘」の順に重要度を指定)

戦況が悪化して、外地の司令部などを占領されて、通信部もろとも暗号書が敵の手に渡った形跡は十分にありました。例えばアメリカの敵信解読班は、極めて優秀で大変な優れた人材と規模の組織を設けて、解読成果をあげていたことが判明されています。

開戦直前の外交機密から、大戦中の日本軍の動向など、几帳面な日本人の予定行動は大半ブレイクされていたとしか思えません。その実例はたくさんあります。

——日本にもアメリカの暗号を解読する試みはあったのですか。

柴崎 ありました。海軍では、大和田通信隊という部隊がそれです。これには学徒出身の予備学生の適材もおりました。私はしかしその成果などについては知りません。米英ではすでに電動の暗号機を実用していたということですが。

四 駆潜艇五十二号乗船

——十九年十月に、駆潜艇に配属されましたが、まず駆潜艇とはどういう船ですか。

柴崎 当時の海軍艦艇の中で、最も小さな制式艦艇です。排水量五百トン未満、対潜水艦探索専用として、昭和十五年に定形製造されました。武装の主なもの是对潜攻撃の爆雷^{ヘッジホッグ}投下機六基です。対空火機は二十五ミリ連装機銃一、十三ミリ機銃四、五基、あとは前甲板の高角砲一基のみ、海底には強いが、空からは全く脆い。船体は細長く

喫水は浅く、体型が高速に向いています。

——どの位の速さですか。

柴崎 大艦でも経済速度は二十ノットそこそこ、スピードのある駆逐艦でも三十までいきません。駆潜艇が速いといつても普通は二十位で、急ぐときに三十以上出る。小さいのが三十以上出すと乗っていて迫力があります。潜水艦は当時水中で八ノット位で走り、いったんレーダーでつかまると観念しなくてはなりません。駆潜艇は相手の針路、速度、水深といったデータを読みとり、これを信管にセットして投下する。爆雷戦の時は、高速航行します。爆雷深度が浅い時、のろのろ歩いていると、爆発のおつき合いをくりますから。

——どの位戦果がありましたか。

柴崎 広大な大洋の中で虫ピン一本さがすようなもので、よほど運がよくないとあのころの探索機能では見つかりません。

でも、二、三沈めたと思います。思いますというのは、水上船を攻めて沈めるのどちがつて水面からよく判らないからです。勿論いろいろ手応えがあつて、爆雷が爆発し、相手を破壊した反応音、直撃すると相手の船内の機材などが水面に浮び、油が浮いてくるので、そうなる戦果あり、です。

もつとも、アメリカもさるもので、大型潜水艦の後部に魚雷を装置して、対潜攻撃者と逃げるふりをしてわざと近づけ、有効距離からその後部魚雷を発射し、逆にこちらがやられる、「こんなはずじゃなかった」という事実が少数ありました。(逆探魚雷)

——小笠原へ護衛に行かれたそうですが。

柴崎 十九年十月に五十二号駆潜艇乗組を命ぜられました。本艇は私が乗る前から小笠原護衛部隊に属し、何度も

往復してました。

輸送船三、四隻と、護衛の海防艦、駆潜艇がついて、之字運動のジグザグ航行でゆきます。

——コースは。

柴崎 横須賀から館山の端を出て、大島から伊豆七島を大たい右に見つつ南下、御蔵島を過ぎると八丈島、絶海にベヨネーズ列岩という鋭いエボシ形の岩と中小の岩が列をなすところがあり、鳥も通わぬ鳥島、そしてやつとメインの父島二見湾に着きます。直線で約千キロ、現在の高速水中翼船なら六時間位でしょうか。古い輸送船は足がおそいし、之字をやるので、一昼夜かかりました。近海はもうアメリカの潜水艦が接迫しておりましたし、たえず空からの偵察、本土空襲が漸増した頃でした。

——被害は。

柴崎 父島に着く前に潜水艦の魚雷攻撃で沈んだ船がいくつかありました。深夜の荒れ気味の海では、予防の効も殆んどなかったわけですね。

父島に二見湾という、小笠原では唯一の良湾があります。入口は広くなく、湾内は丸く広い、巾着みたいな形の良湾で、船が横付けできる栈橋も一本できています。輸送船は湾内に入って至急積荷を陸揚げしなくてはならない。その間我々は湾内でひと休みといたるところ、こちらの動静を知ったアメリカの駆逐艦が湾口の向うから我々に向って艦砲射撃をして来ました。前にこれでやられたという浜江丸という船が破壊、擱座しています。我々に命中はしなかったが、湾を囲む断崖に当って激しく破片をとばしたりしていました。しかし艦砲というものは怖いものです。駆逐艦の砲ですから口径は大きくはないが、威力があります。ですから古参の人々が「大艦巨砲」にしがれていたわけです。

小笠原諸島は、そのほかでは大規模攻撃は受けなかつた筈です。

——それから佐世保へ。

柴崎 二十年の四月に、五十二号は佐世保鎮守府付となり、単独で佐世保へ参りました。

——任務は。

柴崎 やはり船団護衛です。朝鮮南岸、西岸の港へ、または北中国の諸港湾でした。これらへの海域は対馬海峡とい

う有効な航路になるので、敵潜も多く大変危険な地域でした。

——八月八日に米軍機との交戦があつたそうですね。

柴崎 八月六日の広島原爆の日は、青島へ護衛に行つており、すぐ引返すや当日に雪川丸という一万トン位の船を単

独護衛で、朝鮮南岸の鎮海へ届けることになりました。雪川丸には物資と兵員を多量に積んでいました。

八日の午前に佐世保港、対馬の東側を走っていた時、突然低空で戦爆連合の一群が殺到してきました。B-26中型爆撃機（マローダー）とP-38戦闘機がそれぞれ三〜六機、運動性抜群のP-38（ライトニング）と中爆と交互に機関砲、機銃のひどい洗札を受けました。戦闘になると総員配置で、私は暗号室に入りました。こちらの二十五ミリがボン、ボン、ボン、高角砲が間をおいてダダン、それに対してP-38からスキマのない速射を浴せてくる。中は重機と機関砲を接射してくる。私は気づきませんでした。艇長の好判断で、雪川丸を急ぎ対馬の比田勝港に入港させていたので、対空戦は五十二号ひとりで引受けることになったのです。

——原口喜三郎さんの手記「第五十二号駆潜艇奮戦記」（平和祈念展示資料館 http://www.heiwaken.jp/shiryokan/hejwa/10onketsu/0_10_348_1.pdf）を読みますと、乗組員は百二十名だったそうですが。

柴崎 そうです。これが八月八日の対空戦で上甲板各員ばかりが戦死傷、合せて約五十人出ました。

——原口さんが手記でいう、胴体二つの戦闘機というのはこれのことですね。

柴崎　そうです。P-38、双胴双発の優秀機でした。

——その時はどこにいましたか。

柴崎　私は配置の暗号室、電信室の隣りで、航海中もどんどん電報が入るので、翻訳します。大事な電報だと艦橋で指揮中の艇長に届けます。

——対戦中何度も上りました。その時に中爆のロケット弾を艦橋に受けて死傷者を出し、私も吹きとばされました。ロケット弾とはどういうのですか。

柴崎　旧式の大砲からでなく、小型で性能のよい発射装置で速射できる、いわゆるロケット式の砲のことで、この砲弾の先端に特殊のバネがあり、目標に命中すると貫通したあとで爆発します。旧式の砲より近代化したものです。

——P-38の攻撃を実際に見ましたか。

柴崎　ほぼ真上からダイビングしつつ掃射してきて、甲板の射手、機銃手といった者がむざんにやられました。

——中部でも後部でも、惨憺たる状況を呈していたということですか。駆潜艇には軍医を配属せず、医療のトップは衛生下士官でしたが、彼も中部で負傷者の応急手当中に、直撃で戦死してしまいました。

——戦死を免れたとしても、片手、片足をなくすとか、銃瘡、破片瘡の重軽傷者が多かった。今も、この戦友たちのことを想起すると、もういたましくなりません。

——よく五十二号は沈没しなかったですね。

柴崎　そうです。被害は上甲板だけで、喫水以下には全く無キズだったのが不幸中の幸いで、機関、スクリュー、弾薬庫といった船の生命に当たるところが何ともなかったのです。

——対空攻撃はどの位の時間でしたか。

柴崎 時間はせいぜい二十分あるかないかです。

相手の方が長時間もたない一編隊なので、二十分位でも一編隊にしては長い方でしょう。ですが、やられたこちらとしてみると、二十分もくり返しやられるのは堪らない長さに感じます。

——その間の艇内の方はどんな感じでした。

柴崎 これ以上の異常体験はそうはないわけで、ことに対戦経験のない者たちは激しい精神ショックを受けます。歴戦の原口さんのような「勇士」たちも、やはりこれはこれで大変でしょう。しかし歴戦の乗員がいることで、とっさの処理、対処はさすがですね。

——敵機が襲来した時に尻込みするような気持ちは起きないものでしょうか。

柴崎 やはり本能的に避けるんですね。十三ミリ機銃の射手は優秀な人物ですが、弾が来ると、咄嗟に銃身の陰にかくれようと動いたりします。真正面から向ってきて射つてこられて全く平気ということはまず考えられないでしょう。

五 敗戦

——八月九日、長崎原爆の日は、佐世保にいたのですか。

柴崎 はい。対馬の時の破損修理のために急遽佐世保に戻っていました。そして負傷者を海軍病院に送りました。

病院といっても、洞窟を掘っただけの粗削りの中なんです。そこへ行ったら、中に全身包帯で、目だけあいている患者がズラリと並んでいるのです。長崎では収容しきれない被爆患者です。それはもう、正にこの世ならぬ有様としか言いようのない場でした。

——その患者は海軍関係者ですか。

柴崎 よく判りませんが、民間の人もいたのでしょうか。

——そして、八月十五日の模様はいかがでしたか。

柴崎 十五日に重大放送があるとのことで、陸上の港務部だったかと思いますが、ラジオのある室内に将兵みな各艦船から集ってきました。ラジオの音声が雑音ひどくてよくわからなかったものの、「堪え難きを堪え…」という言葉を書いたときに、ああこれで終ったな、と思いました。

——残念とか、開放されたとか、その時にどう感じましたか。

柴崎 暫くは一種の放心状態でしようね。負けてくやしいとか、助かったとかいった観念が浮ばない、むしろ戸惑いのような。ご理解しにくいでしょうが、そうした錯雑した精神状態が少し続いたと思います。でも、一夜あけた頃には、「ああやっぱり敗けたつたなア、とても勝ちいくさなんかしていなかったもの…」という実感が濃くなって、少しづつ冷静になってゆきました。あとが大変だろうとも考えました。

——すぐに佐世保から自宅に。

柴崎 すべてやれる限度までみんなで整理をして、戦死者の霊にあつくみなどで祈って、二十五日に解散しました。私は、母が故郷の滋賀県の実家に疎開していましたから、とりあえずそこへ参りました。そして、秋に東京の自宅が幸い焼けずにあつたので、母と兄とで戻ることができました。

——友人で戦死された方はいらっしゃいますか。

柴崎 例えば早稲田でのAクラス約三十五人の中で、戦死、戦病死が七人いました。これは、こちらの資料センターのリサーチによって知ることができたのですが、その中の勝又勝雄君、とくに親しく気の合う学友でした。戦後す

ぐにご自宅にお便りをしたら、ご家族から「特攻で戦死しました」とご返事をいただいて、脳貧血を起しそうになったものです。

陸軍の特攻といえば知覧基地で、戦後知覧に特攻平和祈念館ができていたのを知りましたが、私も会社づとめに集中する何十年もがあつて、ついに訪ねる機会がなかったのです。

それがどういふことか、去年の秋ごろから、どうも勝又君の何らかの記録が知覧の祈念館にありそうな予感がしきりにして頭から離れないのです。そうしたら間もなく、こちらの聞き取り調査に参上することになり、学歴、戦歴を掘り下げて下さると共に、勝又君関係の消息にふれることができました。平和祈念館の方に電話を頂き、その特攻隊員で戦死した方々の知覧基地での記事、遺影を集録した貴重な本を入手することができました。そこに正に勝又君の記事、写真を掲載してありました。ほんとに感激しましてね、どうも半年前から、彼の周波みたいなのが伝っていたのでしょうか。

思えば、私の体験はほんの局部の小規模なもので、勝又君のような、どんな辞書にもない「特攻」という人類の良心を破壊するような特異な犠牲者や、大和、武蔵、ビルマ戦線、ガタルカナル、アツツ島、シベリア抑留など筆舌に尽し難い未曾有の悲惨極まる場で戦死された方々に比べれば、実に微小なものでしかありません。あの大戦をふり返ると、もう思うこと、言いたいことが山ほどあるのです。

——勝又さんのご遺族からのお手紙は、今お持ちですか。

柴崎 それが戦後の混乱で失くしました。それに、当然弔問すべきでしたのに、ついに果たさぬまま、何とも後悔が消えません。彼のような気の合う友人がいれば、戦後の世相の中で仕事のジレンマに悩むような時に、きつとよきアドバイザーになってくれて、永く心利きたる交際を続けたと思うのです。

—
 白晝港の三分の二に我艦は仇敵機の反覆
 攻撃をうけ十五名の生命を奪ひ、三十名に血傷を
 流し出して逸脱した。

生命の危険の危険に曝されるとき、自分は敵機
 の下には非流的な、必死の機銃音をき、これが
 一着の我々の生命を救うかと思つたのを
 感じた。危境に於ける敵機の状態にはよく似た
 とんでもない心算状態の感とをうらした。

敵機の機銃はいつも非常にきれいな音をたてる。
 私は父島以来これを聴取して何か妙な気がして
 ならない。

それは科学の進歩は非常に卓抜なる構成的美を
 つくり出さうとあるからだ。

流線型とか角と流との組合せも、美に美しい。

科学だ。

科学なくしては到底今後の利便は(大なる意味の
 利便は)続けられない。

困倦休憩。—

私はせせせしい暗子袋に敵機の外縁命中による
 激震を感じ、蒙るたる防火塗料のほげが落ち
 土コリの中で身を固くして毛布を被つて伏せていた。

又しても例の機銃音がいつか入り交つて返つて来る。

そしてその頭上を大なる勢いで通過する際に又
 此のわが外縁の破裂する音をきいた。

私はさうした中に伏せる前に南さかしてゐた暗号書や
電報や訳文紙等を気がついた。船は左舷に浅い
片向いてゐる。船は沈没するかも知れないのである。
と、夢中になつてゐる私の耳を打つはげしい電音の
呻き声かとびこして来た。

私はそれをきくと反射的に毛布を肩のけち起す上
いつの間にやら電気が怖えてくら闇になつた中で手すり
から暗号書を引出し搬出臺に詰め込んだ。

そして銃臺の入つた重い搬出臺を下へ降りした時
左の管中にクククとやける様な痛みを覚え思はず
その部分に手をやると着てた防護服に小さい穴が
あいて又ククと指につくところがある。血だ。

銃丸は私の敵機のオーストリアの艦上機が
管中を撃つて行つたのである。その銃丸は丁度防護服の
縫合に直りぬけ、革ベルトを裂き、私の管中を穿つた
二か所程あった。

私の妻姪に美しいと感じた敵の機銃は右に右に
私自身を傷つけたのである。

私はそのときわけの分からぬ程猛烈な憤激を覚え
兵士としてゐるから地位はげしい憎悪を敵機に
感じた。

それは今迄に嘗ておぼろげな嫌にうら悲しい、しかし
激烈な感情であつた。私は何の期待にもおぼろげに
裏切られた様な気持ちがあつた。

私も金爆発を回避した為に船は沈没しなかった。
比田勝といふ相手の渡港に入り、死傷者を陸上へ上げ、
船は血と油の中にドリリと突込み丸げな有様
であった。

私は戦死者に名札をつける為、紙と鉛筆をもって
船中に先任衛生兵長と共に居た。死体はひとつ、一死に
誰やらさへはり合らなかつた。しほり小をかついて来た
者は「誰ぞです」と平気でいい。私はそれにはた
一時お前造一語に談笑あつた人との変果てた姿を
見て何ともいへぬ感懐に捕はれたのであつた。

~~膝~~膝の下かまどとらぬで腹部迄の露片が露傷の
傷を食ひ頬かにけて眼玉かつり上つてゐるが、私の到る
先任である以上である。顔は何故か黒黒にすけ
胸部に致命傷をうけ足部に露草露草にたつてゐるが
M大尉であつた。腹部に上つたけしなく腸が裂けて
しほり裂け口は大きな回虫かうねつてゐるのか死ぬ迄
船輪にかかりつゝゐるS兵長であつた。顔も胸も
定も滅たにやれ丸血まじりの肉塊が電測員のS兵
であつた。身体に外傷は一つなくやはり眼玉かつり上
つて頬のこけに代りのI一本もゐた。心臓にたい一発
毒しいリPを胸に抱いた様になつてゐるのは電測の
N中尉であつた。片手なく胸に替の筆の枝なぐは
S兵長であつた。他に三人を入りてこれら三人は
皆船橋の四発の口が外砲発をうけて死んで行
つたのであつた。私はかうに想像は出来ない変りはた

誘誘たる遺骸に一人は驚き乍ら名札をそののせ
 やつた。重傷者は半死したつてゐるが、又は死と
 意識を失つてゐるが、じつと痛みを覚えてゐるが、尋
 夫に迎へて居る船にのせられ島の住民の親切看護
 をうけつ、陸軍に向つてあつた。

私はそれ以外、自分の責任である機密圖書妻の
 黒幕の存在をたしめ、たゞ一人船に残つたが、それ
 黒幕なき旨をといた。

それから船は半滅した乗員の手によつて応急修理
 を行つた。かゝるときは船中の様子去つたあとの
 おかしくなつた空虛な気持であつた。それは余りに
 季の来するが(未だ夜の)短くは時に一かにおいせ
 結局自分の何があるか、まはり分らぬたらしはすま
 交つてゐるのがある。

